

短 報

アンドンマユミについて (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: On *Euonymus oligospermus* Ohwi

アンドンマユミは、1935年に福島県の星大吉氏が、福島県松枝岐村へ釣りに行った際に、果実の着いた変わったマユミ属の植物を発見したことに始まる。小泉源一氏の研究で、当初は朝鮮、満州、ウスリー、アムールに分布するイトマユミ *Euonymus pauciflorus* Maxim. と同じものと考えられていた。大井次三郎氏は松枝岐のものはイトマユミとは異なることに気が付き、星氏に花の採集を依頼した。星氏は再度採集に出かけ、数株あるのを確かめたが、時期がやや遅くて十分な花は採集できなかったと言う。大井氏は果実の標本をもとに新種として発表している(植物分類地理 5: 185, 1936)。星氏は1939年にも果実の標本を大井氏に送っている。こうした経緯は福島県植物誌に述べられている。このように星氏はアンドンマユミの自生地を知っていたが、その後長くこれを採集した人はなかった。その後大井氏は、一時

期イトマユミと同種と考えるように自説を変更した(植物分類地理 12: 113, 1943)が、しかし後にまた独立種として扱っている。奥山春季氏はイトマユミの亜種とする説を提唱している(植物分類地理 20: 31, 1962)。また平凡社の日本の野生植物木本編(1989)ではアンドンマユミを独立種としたが、日本と朝鮮に分布しているとするなど、アンドンマユミの独立性が大分怪しくなってきた。資料が不十分で、その形態が十分把握されず、果実だけでは異なる見解がでてきて結論がつかないので、花も確かめたいと考えていた。

1980年にこの自生地が再発見された。これには会津高田町の馬場 篤氏が関係しているらしく、同氏によりその経過が報告されている(会津生物同好会誌 No. 19: 60, 1981)。また同氏により生品にもとづく花の形態の観察も報告され(日本植物学会, 第50回大会講演, 1985)、花のカラー写



Fig. 1. *Euonymus oligospermus* Ohwi. Hinoemata, Fukushima Pref. Photo. by T. Orikasa, May 23, 1994.

真が1990年に発行された福島県植物誌に載せられている。アンドンマユミが健在であることが明らかになったが、花の実物を見ないかぎり、上記の異なる見解に結論をだすことは難しい。Flora of Japanでアンドンマユミを記載する必要から、福島県の数人の方に花の標本を見たいことを依頼したところ、福島市の折笠常弘氏が、桧枝岐村の元村長の星 廣一氏が栽培していることを知り、桧枝岐村にでかけて写真 (Fig. 1) と花の標本を届けて下さった。これでアンドンマユミの性格を明らかにすることができた。1980年頃に発見されたものは桧枝岐の幾軒かの家に植えられたと言われるが殆どが枯れ、星氏宅のみに1株が鉢植えで残っていたと思われる。

イトマユミに比べるとアンドンマユミは葉が大きく、長さ5-12cm、幅2-4.5cmあり、花序には1個または3個の花が着くが、3個の場合、小花柄が長く、花期に両側の2個では長さ約10mm、中央の1個では長さ4-6mm、花はやや大きくて径5-6mmである。イトマユミは、葉は長さ3-8cm、幅1.5-3cm、両側の2個の小花柄は花期に長さ3-5mm、中央の1個は長さ1-2mm、花は径約3mmである。アンドンマユミの計測した個体数は少ないけれど、イトマユミとの間には明らかな差異がある。特に花序につく3個の花のうち、中央の花は両側のものから少し短く細長い小花柄をもつ。中央の花は発育の悪いものがしばしば見られるがそれでも細い小花柄をもつ。イトマ

ユミと明らかに異なる。両者は別種として区別すべきものと思う。上記の特徴からすると、アンドンマユミは会津に限定され、大陸のものはすべてイトマユミである。

アンドンマユミについて折笠常弘氏には文献、写真、花の標本など大変御世話になり、また新潟の伊藤 至氏にも文献で御世話になったことを厚く御礼申し上げます。今回の調査で頑なに協力を拒否した複数の人に出あったのには驚いた。植物を保護するために自生地を秘密にしておきたい為のようである。しかしそうした消極的な措置でこの植物が保護される保証はない。自然災害や、林道、ダムを作るなどの人為破壊を受けないとも限らないし、現在の状態では自然消滅も考えられる。マユミ属のものは挿し木で活着しやすいから、アンドンマユミもそれで増やせると思う。挿し木で増やすか種子でも蒔いて増殖を図る必要がある。特に地元の植物研究者にぜひそうした努力をお願いしたい。

A. Leaves 5-12cm long, 2-4.5cm wide; flowers 5-6mm in diam.; pedicels of 2 lateral flowers ca. 10mm long, pedicel of central one 4-6mm long *E. oligospermus*

A. Leaves 3-8cm long, 1.5-3cm wide; flowers ca. 3mm in diam.; pedicels of 2 lateral flowers 3-5mm long, pedicel of central one 1-2mm long *E. pauciflorus*

(東京大学理学部附属植物園)

帰化植物ノート(6) (浅井康宏)

Yasuhiro ASAI: Miscellaneous Notes on the Naturalized Flora of Japan (6)

13) ケショカツサイ (ケオオアラセイトウ) (新称)

周知のようにショカツサイは中国の原産で、古く江戸時代から我が国でも栽培されてきたが、広く逸出帰化状態になったのは第二次世界大戦後のことである。本種 *Orychophragmus violaceus* O. E. Schulz var. *violaceus* は全草が平滑で果実も無毛であるが、最近、果実に顕著な白軟毛を密生するものが、栃木県下で田代俊夫氏により採集

(1994.5.15) された。これは var. *lasiocarpus* Migo (J. Shanghai Sci. Inst. Sect. 3, 4: 149, 1939), すなわち「毛果諸葛菜」にあたる。なお同氏が、この存在に気付かれたのは一昨年の由。現在、宇都宮市近郊の塩谷町の路傍などに、通常の無毛のものに混ざって群生し、この有毛品は着実に殖え、分布範囲も広がっているとのことである。

従来、我が国でも知られているヨーロッパ原産で果実が有毛なケカキネガラシ *Sisymbrium*